# HITOKOMART No.1

2015年頃から一コマ漫画を大きなキャンバスに描くことを続けてきました。
小さなサイズのケント紙にペンと水彩絵の具で描くというこれまでの1コマ漫画の表現形式では充分に伝えられないものがあること、アクリル絵の具で刷毛や筆で描くダイナミックさに魅力を感じていること、ユーモアアートとしての見せ方にこだわって描き続けてきた作品は2018年度の漫画家協会賞カートゥーン部門の大賞を頂きました。
あらためてこの場で私なりのユーモア表現をご覧いただければと思います。


## 篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

F-50号

## 縛る

伊勢の二見興玉神社、二見ヶ浦にある夫婦岩の風景は、関西の人間には馴染み深いモノだ。
お伊勢参りは江戸時代の読み物や落語の世界にも登場して当時の人々の伊勢神宮への深い信仰心がうかがえる。
今は平和学習や災害学習などの教育的意義を重視した修学旅行が中心になっているが昭和20年代の大阪の小学校の修学旅行はお伊勢さんが定番だった。
近鉄特急で大阪上本町から1本という地域性もあったのだろう。私も伊勢神宮前で撮った小学校の修学旅行の集合写真をはっきりと憶えている。

土産物店ではこの夫婦岩のミニチュアの置き物やその絵の描かれたペナントを買って帰る友人も多かった。
海面に突き出した男女の岩を繋いだ後ろから、朝日が上ってくる風景も年賀状の定番イラストとしてよく使われた。
縁結びの神社としても有名だが、男女を繋ぐのがこんなに太くて切れそうも無い綱だと、どちらに取っても辛い夫婦生活になるのではと思ってしまう。
切れそうで切れない、そのためには双方の気配りや思いやりが必要となる赤い『糸』が一番ふさわしいんだろうな。

# 握手

鳩が平和の象徴と言われるようになったのはいつ頃からなのだろう。
多くのポスターやカートゥーンにはたくさんの白鳩が描かれてきた。
日本ではタバコのピースのデザインが最も象徴的なモノの代表だろう。
しかし若い頃、エジプトを旅行した折、ランチで鳩の丸焼きが名物料理として出た事があって、その時に鳩に対するイメージは世界共通ではないことを感じた。
握手も西洋では相手に対する敬意と親愛の情の表現として当たり前のことだが東洋ではその習慣は元々無かったものだ。
そして最近では新型コロナウィルスの影響で握手を避けるようになった。

お互いの言葉や所作で心を通わす行為がどこかでハラの探り合いという風に見えるようになったのは寂しい話である。

F-30号

# 進化

昨日まで出来なかった事が突然出来るようになる事がある。
自転車に補助輪なしで乗れるようになった時や鉄棒で逆上がりが出来た瞬間もそうだ。
でもこれは『進化』というより『成長』と言う方が適切だろう。
そんな小さな成長に出会った時の感動は結構大きい。
我が子がハイハイの時期を過ぎて、立ち歩きが出来るようになった瞬間もそうだ。

もちろん、人類が2足歩行を始めた瞬間は歴史的な『進化』の瞬間であったろうが、周囲はそれをどんな気持ちで眺めていたのだろう。
もしかするとそれは誰にも認識されないままだったのかもしれないし歩き始めた本人にも何が起こったのかわからない不思議な感覚だったのかもしれない。
『必要は発明の母』と言われるが、進化にもそんなフレーズが合うようだ。
しかし、それと平行して退化して行くモノもたくさんある事に人は意外と気が行かない。

F-30号

# クリック！

『群衆の中の孤独』という想いを若い頃にいつも感じていた。
他社とのつながりを求めながらも繋がれないもどかしさを思いながらひたすら絵を描く事で自分を主張し続けていた。
ネット社会になって人のつながり方は大きく変化した。
パソコンの画面は世界中に繋がる入り口となったがそれぞれのプライバシーや個人情報が侵されたり盗まれる事も多くなった。
どこかで誰かが自分を見つめている。そんな不安からパソコンのカメラレンズを塞ぐ事も常識となった。今夜も誰かが、誰かの部屋をクリックしている…

# 空気注入

芸能人の家のルーツを探るテレビ番組が話題になっている。
先祖代々の家系図があるような家は少ないだろうが、自分の2代前の家族の事でさえ知らない人も多い。
親が自分の子どもや孫に自分の人生を語る機会も減ったように思う。
人生で得た知識や技術や体験は記録できるほんの一部を残してその死とともに消滅するが『才能』は見えない所で受け継がれて行く。
毎日、孫の相手をしながら、喜々として絵を描き続ける孫の姿に、幼い日の自分が重なる瞬間がある。

F-30号

# 老老対決！

突然キレる老人が増えているらしい。
もともと頑固オヤジやカミナリオヤジは何処にもいたが、最近の老人は意味も無くキレるらしい。
老人同士の喧嘩はもとより、タバコを注意した幼児の首を絞めたり通りすがりの幼児を殴ったりと、以前は考えられなかった事件が多発している。
65歳以上のこの手の事件は、年間の一般刑法犯の20%近くにのぼるというから、単に老人が増えたというだけでは済まされない気がする。
団塊世代が子どもの頃、出会った老人たちとは違うある種の『障害』を持つ老人たちは、その団塊世代なのだ。
戦後の日本をがむしゃらに生き抜いてきたモーレツ世代が、そのエネルギーの吐き出す場所を失ってもがいているようにも見える。